南朝五百番歌合

五百番歌合

百二十七番　左勝　　権大納言公長

さらでだにかわくまもなきあま人の
　　袖や朽ちなむ五月雨の比

右　　源頼武朝臣

影しあれば猶数そふる池水の
　　そこらにみえてとぶ蛍かな

飛ぶほたるそこらにもゆるかひもなしあまの袖だに
ほさぬ五月

百三十一番　左勝　　藤原経高朝臣

あさきせにせかれしなみは岩こえて
　川音たゆる五月雨の比

右　　関白

難波江や秋くるかたのしほ風に
　あしのはみだれ飛ぶ蛍かな

あしのはもしたになりつつあさきせの岩こす浪の
まさる五月雨

百三十二番　左　　権中納言実興

暮れてゆく野べの蛍は旅人の
　　袖の玉かと見えまがひつつ

右勝　　太宰師親王

たかねには夕立すらし吉野河
　　たぎついは浪音まさるなり

暮れてゆく野べまで知らぬ夕立を峰よりおろす滝つせのなみ

百三十八番　左　　弁内侍

ねにたてぬ夜半の蛍の誰ゆゑに
身をこがすまで物おもふらん

右勝　　中納言光資

ともしするは山が峰に入る鹿は
ねにこそたてね身をやをしまぬ

ともしするは山がみねの火のかげにのべの蛍よいかが
およはむ

百四十番　左勝　　女房

あつめては国のひかりとなりやせむ
　我が窓てらすよはの蛍を

右　　権大納言実為

水の面にもゆる沢べの蛍かな
　なににけつべき思ひなるらん

かすかなる沢の蛍もあつむれば国のひかりとなりけるものを

「国歌大観」より